



# 風薫る白い花の香かな

撮影取材で出会った探訪記

## 第8話

尾道市文化財保護委員 写真家  
尾道ユネスコ協会事務局長 村上宏治



▲●●●頃の、山波地区の桃畑での様子。奥さんが大八車に乗って、畑に向かうところでしょうか。のどかで仲睦まじい様子の写真が残されています。

### 尾道は山波地区の桃

尾道に山波<sup>さんば</sup>という地区があります。桃太郎伝説が口伝として伝えられ、秋には餅つき神事に山波神楽。正月には、とんど祭り。地域の人達が連携し、祭りとなると、子どもは走り回り、女性は割烹着、男性は法被姿で、老いも若きも昔ながらの行事を大切に継承しています。その山波地区は桃の産地としても知られています。三月に入ると、山波の桃畑は、淡い紅色や、艶やかなシヨッキンゲビンの花の色で、山の斜面が染まります。

### 山波の桃畑を描いた、近世の日本画家・森谷南人子

笠岡出身で、尾道に居を構え、制作活動に専念した、日本画家の森谷南人子（一八八九—一九八一）さんが、昭和十五年（一九四〇）「桃花処々」と題した作品を発表。描かれた絵は、山波の山に花咲く桃畑。そこに二人の人物の



▲森谷南人子「桃花処々」（尾道市立美術館蔵）

### 故郷・尾道は、桃の出荷量が県内の六割。桃のルーツやストーリーとは。

六月も後半に入ると、山波の桃の出荷が始まります。県内で六割の出荷を誇る尾道市と知ったのは最近の事です。更には、現在私たちが美味しく頂く桃は、江戸時代になって品種改良が盛んに進められたもので、食用としての普及が始まったのは、明治二十八年（一八九五）、小山益太<sup>こやまますた</sup>（一八六一—一九二四）が、岡山で桃の新品種「金桃」を生み出し、更には、明治三十四年（一九〇一）に、小山の弟子である大久保重五郎（一八六七—一九四一）によって、新品種である「白桃」が生まれます。日本の産地で中心品種となっている桃の大半のルーツは、この「白桃」とされていることを知り、驚きました。岡山と言えは桃、桃といえば桃太郎。甘く美味しい桃の発祥が岡山。では、桃とは一体どんな歴史やストーリーがあるのかと、やはり興味が湧いてくるのであります。

### 鬼神・邪気を払う桃、薬用としての桃

桃・・・その歴史は古く、遺跡から出土する桃の種は、中国では約七五〇〇年前まで遡ることが分かっています。日本では、縄文時代前期（約六〇〇〇年前）の九州の遺跡から出土し、その後、縄文時代中期には東日本からも出土しています。

古事記や万葉集などにも登場しています。桃は五行の精なり<sup>いさなみのみこと</sup>ともいわれ、古来より邪気を払って百鬼を制すと信じられた、信仰の対象でした。

モモを漢字で「桃」と書くのは、「兆」を持つ木<sup>とうげん</sup>として、未来を予見して魔を防ぐ木と考えられていたことを物語ると、漢文学者の白川静著書『漢字・生い立ちとその背景』に綴られています。また、桃の木は多くの実を結ぶことから、聖なる多産の木と考えられていたことから「家族に繁栄をもたらす縁起のよいもの」<sup>いさなみのみこと</sup>「女の子の末長い幸せを祈る行事「桃の節句」になったとありました。今でも、中国では誕生日など祝いの席

に「桃まんじゅう」が並び、風水でも、桃・橘・栳榴<sup>せきりゅう</sup>は「三柑の実」と呼ばれ、幸運を呼ぶ果物とされているそうです。

古代中国では、桃の木は鬼神や邪気を払う力を持ち、桃の実は不老不死や長寿をもたらす食べ物と、考えられていました。

日本でも、いつからか桃の持つ特別な霊力が信じられるようになり、奈良時代の『古事記』には、伊弉那岐命<sup>いさなのみこと</sup>が伊弉那美命の追手を撃退するために、三つの桃の実を投げたという話があります。そして平安時代の『今昔物語集』には、鬼の侵入を防ぐために桃の木を使う話が載っています。

また平安時代には、桃仁<sup>とうじん</sup>（種子が薬として用いられていたことが、『延喜式』<sup>えんぎしき</sup>に明記されています。

桃の歴史も古いのだなあ、あの甘くて美味しいのは、新しいのだなあ、と感心しつつ、そしてあの愛らしい桃の形と色合いに導かれ食べたくなり、JA尾道市の「ええじゃん尾道」に出かけてみました。



「日川」「赤宝」「さくひめ」が次々と朝一番に、棚へ運びこまれます。どれにしようかと繁々見ると、私には桃という事は分かるのですが、その違いは表記されたシールで知るしかありません。撮影中に漂ってくる甘い豊かな桃の香り。今日は南人子さんの絵を見ながら、ゆっくりと桃を頂きます。事にしてしまおう。良い兆しがありますようにと、願いを込めて。